□　器楽（室内楽を含む）

渡　辺　　和

2021年器楽室内楽界も，2020年３月以降の新型コロナウィルス対応に振り回され続ける。多彩な文化イベントが期待された東京2020はヴァーチャル・スポーツイベントに留まり，器楽室内楽界には作品にも演奏にも後のレガシーは皆無に終わった。

◆外来演奏家の動向

指定国籍外国人は２週間隔離，一部は「バブル方式」を条件に４日間隔離での活動を許すという入国制限の下，限られた数の外国人演奏家の来日が許された。とはいえ，日程変更や公演中止もある状況での２週間滞在など招聘側のリスクは大きい。また，４日隔離の条件が極めて曖昧だった。結果的に外国人アンサンブル来日は，政治力のある大規模芸術財団や大手音楽事務所の招聘か，献身的な個人の尽力でのみあり得た。ラ・フォル・ジュルネ，札幌PMF，松本セイジ・オザワ音楽祭らが中止，前年から延期されていた第10回大阪国際室内楽＆フェスタが３月に中止の決断をしたのは極めて残念である。

来日アンサンブルを網羅しよう。１月には，２週間の隔離期間を経たイザベル・ファウストとアレクサンドル・メルニコフが，コロナ禍勃発後初となる外国人のみによる二重奏日本ツアーを敢行（１月23日埼玉，24日三鷹，25，26日王子ホール）。誰も想像だにしなかったが，これが2021年唯一の外来奏者によるヴァイオリンとピアノのデュオとなった。３月から４月の「東京春・音楽祭」は外来奏者の招聘を断念し開催されるも，６月の「サントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデン」は予定された弦楽四重奏４団体のうちエルサレムQとキュッヒルQが来日，前者はベートーヴェン全曲（６月６，７，８，10，11日），後者はハイドン撰集（６月24，25，26日）を披露，室内楽ファンを喜ばす。

オリンピックが強行開催された夏に向け入国制限も緩和され，五輪開催中にダニエル・ゲーデが大須賀恵里との二重奏を披露（７月27日福岡アクロス，30日日経ホール，８月５日軽井沢大賀ホール等），軽井沢ではセミナーも開催する。レーピンが夫人のザハーロワと来日，アンサンブルを従えたヴァイオリンとバレエの世界的名手に拠る異色のツアーは特筆すべきであろう（８月４日堺，９日宮崎，11日前橋）。

「東京2020」全日程終了後の９月末に緊急事態宣言解除，イベント開催における各種ガイドライン等が更新されるや，音楽業界の日常への回帰の動きが一気に加速した。欧州で大人気のレオニダス・カヴァコスが萩原麻未とブラームスのヴァイオリン・ソナタ全曲で大柄にして繊細な二重奏（10月20日オペラシティ），高松宮殿下記念世界文化賞を受賞したヨーヨー・マがアリーナ会場を含めた無伴奏リサイタル（10月30日名古屋，31日川崎，11月３日那覇），再来日のイザベラ・ファウストも無伴奏でバッハを披露（11月17，18日オペラシティ）。二重奏では，巨匠ジェラール・プーレが気心知れた日本人ピアニスト川島余里と（11月24日日経ホール）。フルートのエマニュエル・パユとチェンバロのバンジャマン・アラールの共演は，唯一の海外管楽器スター公演だった（11月30日王子ホール，12月1日箕面，３日兵庫）。

総計11公演が行われた民音主催のベルリンフィル団員によるブルーム・クインテットは，唯一の海外室内楽団全国規模ツアーとなる（11月23日大牟田以下，12月７日横須賀など）。なお同団は，同じ主催者がベルリンから招聘する奏者が11月末の岸田内閣による外国人入国停止宣言で苦境に陥った古澤巌クリスマス・コンサートの代役を引き受け，11日の名古屋に始まり東京横浜を含め18日北九州まで６公演を行うという珍事も起きた。外国人鎖国直前に日本に入れたフォーレ四重奏団は，日本の室内楽にはない欧州趣味の掛け合いを展開（12月4日横浜青葉台，７，９日トッパン，11日兵庫），メイジャー外国室内楽日照りを癒してくれた。

◆国内演奏家の活動

日本在住の演奏家の手で，器楽室内楽演奏会は活発に開かれている。大作曲家記念年としてはストラヴィンスキー没後50年，サン＝サーンス没後100年，ピアソラ生誕100年程度で，ストラヴィンスキーは器楽室内楽に主要作品が少ないこともあり，年の前半はコロナ禍で前年から繰り越しになったベートーヴェン生誕250年が続く感があった。

とりわけ弦楽四重奏では，複数団体のベートーヴェン・チクルスが続く。３月には前年からのQエクセルシオの全５回チクルスが終わり（１月13日，２月６日，３月24日浦安音楽ホール），年末には日本団体初となるベートーヴェン弦楽四重奏全曲録音が世に出た。ウェールズQもチクルスを続け（１月15日第一生命ホール），存在感を示す。重鎮澤Qは前年から延期されていた４回での中後期チクルスを東京と大阪でスタート（７月11日ハクジュホール，10月10日フェニックスホール等），漆原姉妹のひばりQもベートーヴェンを軸に活動（11月19日ハクジュホール）。若手では，YCAオーディション合格で北米での活動予定がコロナで不可能となっているアマービレQが日本各地から引っ張りだこ（２月21日王子ホール，３月13日ハクジュホール等）。10月にはQインテグラがブダペストで開催されたバルトーク国際コンクール弦楽四重奏部門に参加，優勝を飾る。この大会，ヴァイオリンの尾池亜美が日本から審査員に招聘され，世代交代を実感させた。

ピアノ三重奏では，前年秋ARDミュンヘンコンクール優勝の葵トリオの勢いは止まず，秋田から沖縄までツアーを行う（６月６日秋田，12月16日那覇等）。N響コンマスに就任した白井圭らのトリオ・アコードの活動も目立った（６月21日兵庫，10月28日浜離宮等）。東京文化会館音楽監督に就任した野平一郎が，堀正文，堤剛と披露した三重奏はベテランの貫禄（11月20日東京文化会館小）。ヴァイオリンでは，自身が監督を務める音楽祭が延期された諏訪内晶子が，バッハの無伴奏ソナタとパルティータ全曲で日本ツアーを行い深化を聴かせた（10月16日横浜，17日千葉，21日大阪いずみホール等）。

前年後半からの宗次エンジェル基金や文化庁支援ARTS for the future !，演奏配信への公的助成制度の展開らは，苦境に喘ぐ若手中堅演奏家の後押しとなる。ジュネーヴ国際音楽コンクール優勝のチェロ上野通明，打楽器の會田瑞樹，ピアソラ記念年で大忙しだったバンドネオンの三浦一馬らの活動は，特に注目に値しよう。

最後に，コロナ禍でのハクジュホールや小規模ホールやコンサートスペースの活発な動きを指摘しておきたい。演奏家支援の柱となったWeb配信がホール規模や立地に左右されないこともあり，演奏会場の分散や規模の適正化が進展している。一方で，オペラシティ近江楽堂使用停止，ゲーム企業への売却による石橋メモリアルホールの室内楽ホールとしての廃館決定など，残念なニュースもあった。